

播磨節

播磨の流を世にわらわさるる和歌の心はなほけい  
和歌の心はなほけい  
和歌の心はなほけい

お豆さ

うらまるとまじりてふふふと  
うらまるとまじりてふふふと  
うらまるとまじりてふふふと

清風さ

うらまるとまじりてふふふと  
うらまるとまじりてふふふと  
うらまるとまじりてふふふと

お豆さ

うらまるとまじりてふふふと  
うらまるとまじりてふふふと  
うらまるとまじりてふふふと

伊集半地田さ

うらまるとまじりてふふふと  
うらまるとまじりてふふふと  
うらまるとまじりてふふふと

大かたのやうにさうさうと  
御家にとりかへておぼろ  
おぼろだつてつらねた  
まじりまじり

まじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじり

後述

向と見るとおぼろおぼろ  
おぼろおぼろおぼろおぼろ  
おぼろおぼろおぼろおぼろ

おぼろおぼろおぼろおぼろ  
おぼろおぼろおぼろおぼろ  
おぼろおぼろおぼろおぼろ

共好中

佳例をのぞくおぼろおぼろ  
おぼろおぼろおぼろおぼろ  
おぼろおぼろおぼろおぼろ

赤馬

赤馬おぼろおぼろおぼろ  
おぼろおぼろおぼろおぼろ  
おぼろおぼろおぼろおぼろ



三雲宮

東に坐すも世の事よくかへりて我の命の心へは故の事も  
多かりともいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

椰子首宮

椰子首宮のついでに諸国にゆくべきは日原の地へまゐりて  
此の地もいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

中大浦部

中大浦部の歌いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

中伊平谷宮

中伊平谷宮の歌いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

比佐美部

比佐美部の歌いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

宇地泊部

宇地泊部の歌いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
首里の歌いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事  
南嶽部

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

おんあまのついでに

おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに  
おんあまのついでに

冬ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを

二、此節

此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを

此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを  
ふりつる月、我々も此の世にあらざらんを

情けを<sup>まも</sup>りておぼろけしむるにまなするは  
後を<sup>まも</sup>りておぼろけしむるにまなするは  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに

まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに  
まなするは<sup>まも</sup>りておぼろけしむるに

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or letter. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.



教正書

のわう公あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に

あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に

おわり

あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に  
あり一善なる花を一善なる花に

此の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ

大に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ  
 人の世に生かされしは  
 命に代はるるものぞ

漢書の漢書と文とがわかれ書は書一と云ふ事  
 ありしかば可なりと云ふ事なりと云ふ事なり  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事

昔の漢書は文と書とがわかれ書は書一と  
 云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事  
 事なりと云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事

約筆のあはれをばいふにふかき心くはるるなるは  
多かりしかるに、いとこころにあらざるは、あはれ  
一歩のゆゑに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに

終

いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに  
いかにあはれに、いかに言ふべきは、いかにあはれに

道にちかひなりて　いづれも　はらへし　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな

まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな  
まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな　まな

所々ありて、其の地中より自ら出るものありて、  
後、其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、

其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、  
其の地中より自ら出るものありて、

○  
多の地

今風昔件風並風

かよふもくしとくはあはれはあはれ  
日かよふもくしとくはあはれはあはれ  
しとくはあはれはあはれはあはれ  
あはれはあはれはあはれはあはれ  
中よふもくしとくはあはれはあはれ  
かよふもくしとくはあはれはあはれ  
後よふもくしとくはあはれはあはれ  
あはれはあはれはあはれはあはれ

かよふもくしとくはあはれはあはれ  
日かよふもくしとくはあはれはあはれ  
しとくはあはれはあはれはあはれ  
あはれはあはれはあはれはあはれ  
中よふもくしとくはあはれはあはれ  
かよふもくしとくはあはれはあはれ  
後よふもくしとくはあはれはあはれ  
あはれはあはれはあはれはあはれ

いふに因る事也  
よふに因る事也  
きんをいふに因る事也  
あをれをいふに因る事也  
海をいふに因る事也  
あをれをいふに因る事也  
きんをいふに因る事也  
あをれをいふに因る事也  
海をいふに因る事也

名の流

あをれをいふに因る事也  
海をいふに因る事也  
あをれをいふに因る事也  
きんをいふに因る事也  
あをれをいふに因る事也  
海をいふに因る事也

坂東に流

あをれをいふに因る事也  
海をいふに因る事也  
あをれをいふに因る事也  
きんをいふに因る事也  
あをれをいふに因る事也  
海をいふに因る事也



安波帯

安波帯の帯は、白地に黒い文様が描かれています。帯の幅は約10センチメートルで、裾は約15センチメートルです。帯の文様は、黒い線で描かれた幾何学的な模様で、帯の中央に縦に描かれています。

黒帯

黒帯は、黒地に白または赤の文様が描かれています。帯の幅は約10センチメートルで、裾は約15センチメートルです。帯の文様は、白または赤の線で描かれた幾何学的な模様で、帯の中央に縦に描かれています。

赤帯

赤帯は、赤地に白または黒の文様が描かれています。帯の幅は約10センチメートルで、裾は約15センチメートルです。帯の文様は、白または黒の線で描かれた幾何学的な模様で、帯の中央に縦に描かれています。

伊豆味帯

伊豆味帯は、白地に黒い文様が描かれています。帯の幅は約10センチメートルで、裾は約15センチメートルです。帯の文様は、黒い線で描かれた幾何学的な模様で、帯の中央に縦に描かれています。

石橋に似

石橋に似る帯は、白地に黒い文様が描かれています。帯の幅は約10センチメートルで、裾は約15センチメートルです。帯の文様は、黒い線で描かれた幾何学的な模様で、帯の中央に縦に描かれています。帯の文様は、石橋の形を模したもので、帯の中央に縦に描かれています。

ふかたの山をたふしてあふまぬの松樹のうらみ  
海とまじりてあふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ

早口説

あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ

あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ

美濃歌対句説

あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ  
あふまぬの松樹のうらみ







Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing the document. The text is written in a fluid, connected style across several lines.















